

丹波市自治協議会のあり方懇話会 考え方の整理のための講義（記録）

1. 演題、講師

演題	： 「みんなで楽しくまちづくり」
講師	： 近畿大学総合社会学部 教授 久 隆浩 氏 (丹波市自治協議会のあり方懇話会 座長)

2. 講義記録

それでは、時間をお借りしましてお話をさせて頂きたいと思います。

先日、自治会長会でも話をさせて頂きましたので、聞いた事のある話になってしまうかもしれませんが、その方には復習も兼ねて聞いて頂ければと思います。

「みんなで楽しくまちづくり」という事で、こうなったらいいなという様な、キャッチフレーズを付けさせて頂きました。実際に、いくつかの地域ではたくさんの方々が見学しながら地域の活動を展開しておりますので、今日も上手くいっているところの紹介をさせて頂き、皆様のご参考になればと思っております。先程、市長のご挨拶の中にもありましたけれども、一度この機会に、地域活動を見直してみませんかという事をお願いしたいと思います。

(1) 地域活動の見直し

各地域同じ様な状況かと思えますけれども、活動がどんどん増えています。市から依頼される仕事もあり、地域のやる事が増えてきている一方で、担い手が増えていかないという状況です。

この状況に際して、根本的な発想ややり方の転換という事が必要ではないかと思っております。具体的には、二つの改革が必要かなと思っております。1つは活動面を行事型から課題解決型へ変えていくという事が求められているのかなと思っております。2つ目が運営のあり方として、階層組織型からネットワーク型へ変えていけるかという事です。階層組織型、ネットワーク型とは何か、どうすれば変わるのかについては、後程お話させて頂きます。

まず、行事型と課題解決型とは何を意味しているかといいますと、地域の行事というものは毎年メニューが一定で決まっております。去年これをやったから今年もこれをやる。というようなメニューをこなしていくというやり方です。ここでは、これを行事型と呼ばせて頂いております。去年やったから、何十年、何百年と続いているからといって行事をやるというのが行事型と書かせて頂いております。それを、改めて考え直して頂いて、地域には様々な課題がございますので、その課題を解決するための活動と位置付けて頂くと、課題解決型の活動になるという事です。後程、具体的にどうすればいいのかについては、お話させて頂きます。

今までの地域活動は、決まった活動をどのように行うのかであって、そこに新しい活動が加わる状況でますます大変になっています。

その状況の中で、活動の棚卸しをして頂けませんかとお願いしたい。今、地域の中で活動される、すべての団体のすべての行事を出してみるとというのが活動の棚卸しです。ゆうに100を超えていると思います。地域では30以上の団体が動いているはずなので、それを重ね合わせていくと、100を超える活動をされているはずで

その活動の棚卸しをした段階で、一方で体力の見極めをして頂く、この体力というのは2つの体力の意味がありまして、1つは団体としての体力です。具体的には、今、自治会の加入率もどんどん下がっています。という事で、昔のようにたくさんの方に参加頂ける体制ではなくなってきた。その組織全体の体力がいったいどのぐらいの活動が担えるのか、という組織の体力というのが1つ目です。2つ目はちょっと語弊がある言い方ご了承頂きたいのですが、人間の体力も落ちてきます。同じ人間が10年経ちますと、10歳年を重ねるという事にして、個人の体力も落ちてきます。その個人が組織になりますので、その個人の体力が弱っている所が、その組織の体力でも反映しているはずで

そうすると、いったいどれぐらいの行事ができるのか、という事が体力の見極めです。そうしますと、本当に必要な活動というのが見えてくる。あるいは同じ行事でもどれぐらいの規模が活動可能かどうかという事が見極められる、こういう事をやって頂く、わかりやすくなるのではないかなと思っております。

さて、これをやっている地域でご紹介させて頂きたいのが、八尾市の山本小学校区のまちづくり協議会です。ここは「わがまち推進計画」いわゆるまちづくり計画をつくっております。このまちづくり計画、わがまち推進計画の作り方を今日はご参考になるのかなと思っております。

先程、活動の棚卸しということを行いました。活動の棚卸しはまだやっておりません。活動の棚卸しの前に、ワークショップをやりまして、3カ所の人に、今、地域にどんな課題があるのかについて、皆で出し合いました。一方で、地域の特徴や活動を担うのに山本小学校区には、どんな資源があるのか、どういう人の特徴があるのか、こういうものを出し合いました。

そして、次の段階として、出した課題をどのように解決できるのかについて、課題解決の為の方策を考えました。すべての課題に対して課題を解決するために、どんな手段、どんな方法が必要かについてここで出し合いました。

その段階が終わって初めて、現在の活動を出してきました。この現在の活動を2番で出した、課題解決のための方策に当てはめてみました。そうすると、この西田会長曰く、95%ぐらいは今の活動で既にやっているという事が確認できたそうです。逆にいいますと5%はまだ、手付かずの状態だったという事がわかりました。これをどうやって埋め合わせていくのかという事を考えました。

埋め合わせだけをやると、活動はますます増えるけれども、一方で活動の重複する部分が見えてきて、整理統合する事によって活動が減らす事ができたわけです。このような手順で、まちづくり計画「わがまち推進計画」にまとめていった、という事でございます。

これは、新たに作るというよりも、改めて課題を共有して、そして課題解決の為の方法を考えて、そして今の活動を当てはめて行った。こういうプロセスを踏む事で、今までの活動を振り返ってみる機会になりました。そうしますと、今までと同じ活動をやっても、課題解決型の活動になるわけです。

課題解決の為にこの活動をするという何の為なのか明確になり、計画にまとめた事で活動が体系化されたという事です。そして、この活動とこの活動は関係があるというような、活動同士の関係が見えてきた。計画を作るだけで、非常に全体像が分かりやすくなった、という事でございます。

計画作成の時に、西田会長やまちづくり協議会の皆が気を付けた事が、様々な年代の人たちの声が反映できているのかどうかという事でした。本当にすべての人々の声が聞けているのかという事がわからないという事で、若い方も含めて、ワークショップで意見を聞きながら進めていきました。子育て世代は子育て世代の講演というものがございますので、それは当事者に正直に聞こうよという事です。さらには祭りの機会を通して、小学生にもアンケートを取っています。

こういう計画づくりの中で、どうしても、誰が担うのか、資金はどこから調達するのか、という事が気になると思う。先程の山本小学校区まちづくり協議会のやり方は、まず、何が必要か出したという事です。誰が担うのか、資金はどうするのかという事は棚上げしておいて、課題解決のためにはこういう活動が必要だと、皆で考えたという事です。そのあとに、それは誰が担った方が効率的なのか、お金がかかるのなら、資金はどうするのか、という事を改めて考えて行った、とこういう順番でございます。

さて、本日は自治協議会のあり方懇話会ですけれども、ではこのまちづくり計画の策定の中で、自治協議会はどんな役割を担うのか申し上げると、地域の中には30以上の団体があって、様々な活動を展開しております。その団体に集まって頂いて、どんな役割を担ってきたのか出して頂く必要があります。その様な皆が集まる場を作るというという事が、自治協議会の重要な役割になってくるのではないかなと思います。そして、その組織同士をつないでいく事ができていければと思います。先程の山本小学校区も今まで、それぞれの団体がそれぞれに活動を考えて動いた結果、重複した活動が出てきているという事がわかったわけです。なので、集まる機会を作って頂くという事は、自治協議会の役割として非常に大切なのではないかなと思います。

三田市で、まちづくり協議会の設立をしてきたのですけれども、毎年1回活動報告会をさせて頂いております。この活動報告会の中で、それぞれの地域の協議会のお話をお聞きする中で、3つのタイプの協議会の設立の仕方があるのかなというのがわかりました。

1つは、先程市長がおっしゃった統合型。今までの団体をすべて統合して、自治協議会に一本化していくというものです。この場合は、自治協議会を基に、分野ごとに部会を設置する。例えば、地域おこしの部会であったり、子育て教育の部会であったり、健康づくりの部会であったり、テーマ毎に部会を設置して、部

会の中に今まで活動を担ってきた団体に入って頂くという形で、協議会に各諸団体を統合していくという事をやられている地域です。

2つ目が、補完型と呼ばせて頂いております。先程の山本小学校区で必要だけでも、誰もやってなかった活動がありますという話をさせて頂きました。そういう部分を、新たな活動として、協議会が担っていくという事をやっている地域もごぞいます。これを補完型。今までの活動団体を補完していくという事で、補完型と呼ばせて頂きました。

3つ目は、支援型と呼ばせて頂いております。他の団体の活動を、協議会が応援するというものです。少し具体的に言いましたら、例えば、老人会が行事を計画しているが、でも老人会だけでは回せないと老人会の方から相談を受けた時に、他の団体に呼び掛けをする。老人会の行事をお手伝い頂ける方、いませんか？と呼びかけて、老人会以外の団体から人手として参加頂く、そういう仲介をやっていくというのが、この支援型というタイプです。他の団体とつないでいくとか、あるいは他の方の困り事の手伝いするとか、そういう形で応援をしていくというのが支援型でございます。

先程市長は、最終的には統合型が良いだろうとおっしゃいました。たしかに個人的にはそう思うのですが、一挙に統合型にもっていきますと、様々なしなみが起こってくると思います。まずはこの3つのタイプがあって、どのようなポジション位置付けがあって、諸団体と自治協議会の関係をどのように位置付けていくのか考えていきますと、その地域のスタートラインとしてふさわしい関係性が見えてくると思っております。

(2) 階層組織とネットワーク

冒頭に、階層組織型からネットワーク型へ変えていけないかなという話をしました。

この担い手不足の中でよくお聞きするのが、若い人の参加が少ない、特に子育て世代は、子育てや仕事で忙しく、なかなか活動を担ってくださらない。という話がございます。私のお付き合いしている中では、若い人々、特に30代40代に積極的に社会活動をしている方が現れてきました。しかし、こういう方がなかなか地域活動には溶け込んでくださらないという現実を見てきました。私なりに考えているのは、活動の仕方が違うのではないかとこのように思ってきました。若い方は、まさしくネットワーク型を望んでおられますし、ネットワーク型で動いていらっしゃるのです。先程も言いました様に、自治会の加入率が下がる、あるいは子ども会の加入率も下がってきている。いわゆる従来型の加入率が下がってきている事をもって、組織離れが起こっていると考えられていますが、組織離れが起こっているというよりも、組織の活動へなかなか関わらないというような活動離れが起こっているのではないかなというように思います。

それでは、今日はいくつか若い方がやっている活動をご紹介させて頂ければと思います。

まずは、奈良県の生駒でやられております「いこママまるしえ」という活動です。今の子育て世代の方たちは、いろいろなものを手作りで作っておられます。この手作り品を月1回生駒の駅前の広場で販売するという事を展開しておられます。

この中心メンバーが左に写っている佐村さえこさんという方です。佐村さんは地域にありますスターボックスという喫茶店を借り切りまして、親子で集まって話ができる空間をつくってくださっています。こういうのを親子時間と佐村さんは呼んできているのですけれども、こういうのを自分の手で立ち上げて、仲間呼び掛けて一緒に運営をしています。最近、空き家を自分達の手で借りまして、空き家でこういう親子連れであつまる空間を作って頂いております。ちなみに、なぜ、佐村さんはこういう取組みができるかと言いますと、元保育士で子育てのプロです。今は退職されて、主婦をされているのですけれども、自分が手に職をもっているという事で、こういう地域活動、社会活動を展開しておられます。

2つ目ですが、これは大阪府摂津市にある「マミー・クリスタル」という団体です。何をやっているのかホームページには「先生もママ、生徒もママ。子ども連れOKの習い事サークル」と書いてあります。立ち上げたのは左側の新田昌恵さん30代半ばになりましたかね、若いママです。ご主人の里が摂津市でして、摂津市に転居されました。自分の出身地ではございませんので、なかなか仲間や友達がいなかったのです。なので、摂津市役所に行って、お母さんを応援する施策はあるか聞いたところ、子どもを預かるとか、子ども向けの施策はあるのですが、お母さん向けの施策、お母さんが輝く施策が全くないという事だったのです。なかったら自分で作っちゃえという事で、当時はmixi（ミクシィ）という手段でしたが、いわゆるネットを通じた掲示板です。これに声をかけたところ、なんと500人の賛同者が集まりまして、「マミー・クリスタル」という団体が立ち上がりました。ここは何をやっているかといいますと、習いたいというお母さんがいらっしゃる一方で、私教えられますというお母さんもいらっしゃるわけです。これを繋いでいこうという事を作っておられます。ある時は先生になりますけれども、別の講座ではその人が生徒になるというそういう仕掛けを新田さんを中心に進めておられます。現在、新田さんは別のNPOの活動をやっており、それに際して、松田綾子さんというもう数歳若いお母さんに代表をバトンタッチしております。この辺り上手く世代交代をされており、すごく面白い動きをされておられます。今、この松田さんを中心に、今年度「マミー・クリスタル」が摂津市の市民活動助成事業に手を挙げていただきました。どんな事業をするかと言いますと、地域の集会所を使って、ママ達の活動をやると言われました。当初、私たち審査委員はお母さん方に活動拠点がないので、自分達の拠点として集会所が欲しいと望んでらっしゃるのかなと思っていた。しかし、発表のあと質疑応答でわかってきたのは、そうではなくて、地域活動の方とお母さん達を繋ぎたい、その為に集会所を使わせて頂くのが一つの手だという発想でした。お母さん方も、地域の集会所に足を運ぶ事が無い、だから自分達の活動を担わせて頂くという事で、まずは集会所に集まって足を運んで頂きたい。ついては、管理をされている地域の役員の方にもこういう元気なお母さんもいると認識頂いて、そこでつながりが生ま

れたら良い。そのために、活動をやりたいと事をおっしゃって頂きました。一年の報告はまだ先になりますが、既に2つの自治会とタイアップ頂いて、集会所をお借り頂ける手筈が整ったという話は聞かせて頂きました。

3つ目ですけども、これは大阪府泉大津市で活動されている「ホンノワまちライブラリー」という団体です。高島直子さんという方がやっています。彼女も若い子育てママであり、一方で会社も立上げて運営しておられます。その人が本好きという事で、本でなにか輪づくりができないだろうかと考えられ、庭先に小さな木箱を置き、ここに本を持ち寄って気に入った本があればここからもって頂ける、というような小さな本箱を泉大津市内に置くという活動をされております。今、10カ所以上本箱が置かれるようになっていきました。こういうパワーを持った方が泉大津市でもおられるという事です。

これは「atelierNOAHOOR (アトリエノアノール)」と読みますけれども、代表は天川麻子さんです。この方達は、雑誌とか新聞の編集・デザイン、あるいは地域の活動の企画をつくる仕事をやっておられます。素敵なデザイン、あるいは企画で事を動かして頂いています。大阪の河内長野市を拠点に展開して頂いております。天川さんはご主人の転勤で大阪に移ってこられて、それを契機に会社を退職していらっしゃいます。元の会社はどこかと申しますと、リクルートなのです。リクルートで企画デザインをやられていた方なのでプロなのです。今は子育て中で、会社に戻れないという事で、その能力を地域活動、社会活動で展開をしてくださっているという事でございます。能力の高い、やる気のあるママが、今、たくさんおられるわけです。こういうパワーの方々を是非とも地域活動に繋がられないかなというのが、私の思いでもあります。

冒頭の話の階層組織型とネットワーク型の違いについてです。階層組織型というのが、階層という名前の通り、メンバーに上下関係がございます。上下関係があるので、物事は上で決めて、指示命令として下に降ろして一丸となって動くというのが階層組織型の動かし方なのです。ネットワーク型というのは上下関係がなく水平関係です。その結果、上層部がいませんので、皆で考えて動かないといけないという事になります。その違いが、活動形態にも出てきて、自分たちができる事やりたい事を自発的に行うのが、このネットワーク型の動き方です。こういうようなネットワーク型をどんどん増やして頂くと、若い方々もどんどん関わって頂けるよという事になるのではないかなと期待をしております。

階層組織型とネットワーク型の核となる人というのもご紹介させて頂きたいと思います。この階層組織型の核となるのはリーダーです。リードしていく人、引っ張っていく人が重要です。ネットワーク型の核となる人は、ファシリテーターと呼びますが、皆をその気にさせる人です。こういう方が重要になってきます。どっちが良い悪いではなくて、使い分けて頂きたいと思っております。すぐに動く必要のある活動や大人数の活動は階層組織型、リーダーが組織を率いた方が効

果的です。一方で、長続きさせたい活動ややれる人が担えば良い活動は、ネットワーク型で動かしていった方が良いという事で、活動の内容によって使い分けて頂くと、ありがたいなと思っているところです。

3. ネットワーク型の活動展開

地域活動をネットワーク型で展開するとは、やりたい人にやりたい事を任せるという事が原則です。そのためには、世話役は、皆が活動を担う為の舞台とか機会作りに徹するという事ができたらいいなと思っております。

今日は、具体的に3つの事例を持ってまいりました。

1つ目は、八尾の山本小学校区まちづくり協議会です。ここは、年に1回夏祭りで「ふれあいまつり」というのをやっておられます。この夏祭りの運営方法がネットワーク型です。祭りでは屋台が必要ですが、まずは、屋台を出したいグループ、屋台を出したい人を募集するのです。そして、屋台にはテントもいりませけども、そのテントは出したい人が調達してくる。前日のテント張りも自分達でやる。終わった後のテントの後片づけも全部自分達でやる。というような事をやるわけです。実行委員会がやるべき仕事は、このふれあいまつりの区画割をして割り当てをするという、決め事だけを実行委員会がやるという事なのです。だから、すべてやりたい人に、場を提供して行って回しておられるという事なのです。

それを自治会全体の活動に広めていったのが、堺市南区にあります、新檜尾台連合自治会の事例です。ここは、すべての自治会活動を実行委員会方式でやっておられます。20年程前に当時の大崎会長がこれを変えました。当時、大崎会長は総会の時に、ある意味爆弾発言をされました。どういう発言をされたかと言いますと、今年から活動を自治会は一切しないという宣言をされたのです。総会の席ですから、文句が出ました。「会長、何を言い出すんや」「今年は運動会も夏祭りも一切やらんつもりか」という意見がでました。大崎会長はこう返しました。「誰が運動会をやめるって言ったのだ。わしが言ったのは、自治会は一切行事をしないと申ただけやぞ」「運動会をしたい人がいれば、その人たちに実行委員会を作ってもらったらいい」「金は自治会が持つから、今までの様に企画から準備、運営を全部役員だけでやるというのはもうこれからやらない。」と宣言をされたのです。そこからこの新檜尾台連合自治会の活動は、すべてやりたい人が実行委員会を作って、やるという活動に切り替えました。こういう大胆な改革をした所もございません。

更に、三田市のゆりのき台地域活動協議会の事例です。三田市も丹波市と同じように年間何十万円かの交付金が協議会に出しております。この協議会に出ている交付金を他の協議会はほとんど自分達で使うのですけれども、このゆりのき台地域活動協議会は、毎年2月頃に次年度、何をやりたいかと事業公募します。うちの団体はこんな事したいという提案が出てきたときに、地域の為になるのか審査をさせて頂いて、地域の為になるのであれば、交付金の一部をお渡しする

から、あなたたちが活動を展開してください。というような形で交付金を使って頂いております。これも新檜尾台連合自治会と同じように、役員が事業を回さない、というような取組みです。

さて、本当にこうなるの？という不安があるかと思いますが、まずは公募してみませんか？という事なのです。これで手が上がったら儲けもの、これで手が上がらなかったら、今まで通り役員が担うという様に、まずはそこから始める方法もあるのではないかなと思っております。

それと、誰が何をやりたいのか、自分達の思いを伝え合う場所が必要で、この場所が設置できるかどうか、ネットワーク型になるかどうかの1つのポイントです。私は、ネットワーク型活動を「この指とまれ方式」と呼んでおります。「～したい人この指とまれ」と誰かが呼びかけて、賛同者が集まったら、実行委員会形式になって動き始めていくというこういうやり方です。しかし、この呼びかける場所が無いといけないわけです。これを私は、まちづくり井戸端会議と呼ばせて頂いて、月に1回集まって、皆がワイワイガヤガヤできる意見交換の場所として各地で作っております。いろんな人が呼びかけて、賛同者を募っているいろんな活動が動き始める、こういうやり方もありますという事で少し紹介をさせて頂きました。

それと、会議のやり方をホワイトボードミーティングとかワークショップにしてみると、地域活動の雰囲気が変わっていくと思います。先程、階層組織型は役員が決めて、降ろしていくとお伝えしました。逆にホワイトボードミーティングやワークショップの時はホワイトボードや模造紙など白紙の状態からスタートなのです。皆で意見を出し合って意見をまとめていくという事です。まずは皆で意見を出し合えるような雰囲気を作ってくださいと、会議の雰囲気も変わりますし、その後の活動もネットワーク型に変わってくると思います。

さて、2冊本を紹介させて頂きたいと思っております。1つは『町内会は義務ですか』という本です。もう1つは『PTA、やらなきゃダメですか』という本です。この2つは町内会、PTAと内容は違いますが、結論はほぼ一緒です。町内会もPTAもやりたい人がやりたい事をできるように、会長が変える事によって、たくさんの方々が関わる組織に変わった。という顛末（≒一部始終）が描かれている本です。ご関心のある方はお読み頂くと、どういう内容かわかると思います。

話は変わりますが、働きアリの法則というものがあります。これは動物行動学の先生が発見したのですが、働きアリをよく観察しますと、「よく働くアリ」と「ふつうに働くアリ」と「あまり働かないアリ」がいて、これが、2対6対2になるという法則です。おもしろいのが、よく働くアリだけ集めたら、皆よく働くアリのはずなのですが、よく働くアリだけ集めても、あまり働かないアリが出てきて、また2対6対2になるわけです。あまり働かないアリだけを集め

ても、そこからよく働くアリが出てきて、また、2対6対2になるわけなのです。アリ1匹1匹に働くアリ、働かないアリが決まっているわけではなくて、組織になると、2対6対2になる。という法則なのです。人間にも同じような法則がありまして、集団1/5の法則というものがございます。この、5つのタイプに、2割ずついるという法則です。第1集団が自発的に動く方、自分の思いで動いてくれる方が2割います。第2集団は第1集団に触発されて、自分で動くようになってくるという方が2割。第3集団は、自発的には動かない命令されて始めて動く方が2割。第4集団は命令されても動かない方が2割。第5集団はもっとたちが悪くて、自分が動かないだけでなく、やる気のある人の足を引っ張る人が2割いる。という法則です。こう考えていくと、アリも人間も自分の気持ちで動く人は2割しかいないという事なのです。この5番目の方というのは、やっかいだからどっかに行ってほしいと思われがちですが、この方がいなくなると、また8割の中から、この人が出てくるわけなのです。そういう意味ではアリの集団と同じように、こういう方々もおられて、こういう方々がでてくると認識して頂くといいかなと思います。ここでなかなか面白いなと思うのが、自発的に動く方が2割います。この次の2割は、この方々に引っ張られている訳ですから、この2つのグループが合わさりますと4割の方が自分で動くようになるという事になります。4割の方が、自発的に動いてくれるというのは、すごい事だと思います。このような雰囲気を作っていく事ができるかが重要です。

さらに、Wenger (ベンガー) という社会学者が唱えているのですが、実戦コミュニティという事を言っております。これもなかなか面白くて、ある集団のなかにコーディネーターの周りにしっかりと動くグループがあって、これがコア・グループといわれます。このコア・グループが10~15%ぐらいいます。その周りに、コア・グループほどしっかりと動かないけども、事ある毎に手伝ってくれるアクティブ・グループというのがありまして、これが、15~20%だと言われております。その外側にそれ以外の周辺グループという方々がいらっしやいます。これも先程の法則と同じ様に、最初に10~15%の人がしっかりと動いて、そしてその周りに2割ぐらいの方々がそれをサポートしてくれる、というこんな関係です。このような関係をどのように作って行けるのかというところが、ポイントかと思っております。

約束の時間になって参りましたが、もう一つだけお話をさせて頂こうかと思っております。今、私が思っておりますのが、世の中がどんどん変わっているなと思えます。世の中そのものが、ネットワーク型に変わってきている。いわゆるネットワーク社会になってきているのです。今から別の事例を紹介しますが、今までの世の中というのは権力とかお金とか組織で社会を動かしてきましたけれども、これからは共感、そして共感につながるネットワークで社会を動かす時代になってくると思っております。

いくつか最後にご紹介させて頂きたいのですが、このNPO 法人の中でも、最近若い方が社会問題を解決するために仕事として動かしているNPOが増えてまいりました。

1つは「NPO 法人カタリバ」という高校生のキャリア支援、進路相談をされているという団体ですけれども、今村さんという30代の女性の方が22歳の時から、このNPOで活動をされています。

次は、大阪市住之江区を中心とした、福祉系のNPO「NPO 法人み・らいず」という団体です。代表は川口さん、彼も30代半ばです。20代のときから、こういうNPOの活動をやっております。彼らは仕事として、身近で起こってきた社会問題を解決しようとしてやって下さっております。先程の子育てママ達だけでなく、20代30代に社会問題に関心を持って、仕事として取り組んでいる方も現れてきたという事です。

それから、リノベーション、長屋を改装して、カフェにした事例です。こういうリノベーションのまちづくりも増えてまいりました。近くでは篠山にもお店が出てきております。写真で紹介しますが、このような「金魚カフェ」や「桃ヶ池長屋」という長屋を改装したお店があります。大阪市の阿倍野区にある昭和町駅の界隈では50軒以上こういうお店ができています。これを企画運営されているのが、地元の不動産業「丸順不動産」小山隆輝社長です。小山さんが貸主と借主を繋いでくださる事によって、50軒以上のおもしろいお店がどんどん増えていきました。これはインターネットを通じてこんな物件でましたよと呼びかけたら、そこで商売したいとか、ここで住みたいといった方がどんどん集まったのです。大阪市役所ではなく、地元の不動産屋の社長がひとりで動いてこのような展開が出来上がってきたという事です。こういう展開ができる時代になってきているという事です。私がいつも使わせて頂いているキーワードが「できる時に、できる人が、できる事をやれる」です。このように、無理なく楽しくこのような活動ができないかと期待しております。

今日は、参考資料としてお配りしている、宝塚のまちづくり協議会のガイドラインのチェックリストから今日は2つ紹介しようかなと思います。

一つ目が、「参加したいと思った時、参加の意思表示ができる方法がありますか？」です。少し解説致しますと、今まで活動は役員が担ってききましたので、役員以外の方が、「私こんな事やってみたい」、「私こんな事できる」と言う機会がなかったのではないかなと思います。やる気のある人がいても、その人が声をあげられる機会がないと活動が始まらない。やる気のある人が、やりたいと言える場所がありますか？というのが1番目です。

2つ目が、「会議の場づくりを心掛け、それぞれの立場や違いを認め、誰もが活発に発言できる気持ちの良い話し合いができていますか？」です。今までの会議

は、既に案があつて、この案を肅々と認めて貰いたいという会議が多かつたのではないかなと思います。意見を正直に本音で言える、そんな会議ができていますか？という事です。私はこの2つ一番重要な事だと思っております。

さて、最後に、三田の高平郷づくり協議会の事例で締め括ろうと思います。こも見事にネットワーク活動を展開しております。高平では「さとカフェ」というものを展開しております。この写真が「さとカフェ」の風景で元は集会所です。集会所を皆の手で改装して、こういう素敵なカフェを作っております。2日に1回開けており、たまにこのようなランチを出すような事もやられておられます。この中心メンバー、さとカフェ部会の部会長は服部あかねさんです。この方も見たらわかるかと思いますが、若い方ですよね。こういう方が活動できる雰囲気ができあがってきているという事です。少し失礼な言い方になる事ご了承いただきたいのですが、この服部さんは、今までの雰囲気では活動しにくかった人です。なぜかというと、まず一つは村の外からご主人と転居してきた方だからです。若くて女性の為、地域での居場所が無かった方なのです。協議会ができた事によって、このお隣の山田会長が「やりたい事がある人がいたら言ってよ」と声を掛けたのです。そうするとこの服部さんが、「実はカフェがやりたいんです」とおっしゃったので、この山田会長が「だったら服部さんにリーダー任せるからあなたがカフェ作ってよ」という事で、服部さんが仲間を集めて運営を始めたというのがこの「さとカフェ」なのです。このようにやりたい人を募ったというのがスタートです。

よく地域活動のお話を伺いすると、自治会の加入率が下がっている。加入率を上げたいとおっしゃられるのです。私はいつも「会費集めて、義務でやってくれる人を増やしたいのか、あるいは今の会員のままだでもやりたい事を自発的にやってくれる人を増やしたいのか、どっちがいいでしょうね？」と話をさせていただきます。つまり加入率を気にするのか、今の加入率のままだでも活動人数を増やしていくのか、大きく2つの方法があるのです。私はもっと積極的にたくさんの方が関わられるようにした方が、効果的かなと思っております。

最後に、このネットワーク型に切り替える、あるいは、活動を棚卸しする時に、どうしても邪魔する事が起こってきます。なにかと言うと、「お前の代でやめるのか」という話になるのです。長くやってきた伝統がある行事ほど、やめる時の勇気がいるのです。先程市長の話でもありました、お母様が私の代ではやめたくないという話が出てきました。まさしく典型ですよね。長い伝統のある行事ほど、お前の代でやめるのかという話になるのです。本音は多くの方がやめたいと思っているかもしれない。そのときに、止めるという英断をしないといけないのです。事業を縮小する勇気が必要かなと思っており、ここを最後に共有させて頂ければと思います。

自治協議会の中で、今、私が申し上げたような事を参考にして頂き、先進事例として申し上げた事をより広い地域で展開するためには、現状ではどこに課題があって、どの様に乗り越えて行けば、皆が参加できる楽しい協議会活動が展開できるか、今後話し合っていければと思っております。

それでは私の方からの情報提供は以上にさせていただきます。
どうもありがとうございました。